主体的な取り組みを生み出す英語授業：
中学校英語科におけるタスクの導入

学籍番号	229309
氏　名	油利 きらり
大学院主指導教員	橋本 健一
大学院副指導教員	篠崎 文哉

1. 背景と目的

英語教育における変化の一方で、英語が苦手な生徒は常に多い。根岸らによって 2014 年に行なわれた「中高生の英語学習に関する実態調査」では、中学生の 70%以上が 1 日 1 時間以上の英語学習を行なっている一方で、英語が苦手、やや苦手と解答する生徒の数は、学年が上がるにつれ増加し、半分近くが苦手意識を持っていることがわかった。そして、文部科学省によって行なわれた令和 4 年の「英語教育実施状況調査」では、文部科学省が英語力の目安目標として設定した、CEFR A1 相当以上に達している中学生の割合は目標の 50%に対して 49.2%であった。

新学習指導要領へ移行された今現在でも、中学生の英語に対する苦手意識が薄れているとは言いがたい。このような昔から続く状況のもと、多くの研究者が英語学習における学習効果の向上、そのための動機づけについて議論してきた。これらの成果を活用することにより、生徒の主体的な取り組みが実践されれば、生徒の学習効果、英語に対する苦手意識の軽減に繋がることが予想される。本研究では、英語科における生徒の主体的な取り組みを促す授業として、タスクを取り入れた授業の実践を構想して、生徒の主体性を活性化させる授業の検討、提案につなげることを目的とする。

2. 実践研究

2,1 研究方法

本研究では、まず、動機づけ、TBLT（Task Based Language Teaching）の 2 つに関する先行研究を整理・概観し、タスクを用いた授業の在り方について論理的な枠組みを明らかにする。次に基本学校実習Ⅰ，Ⅱと発展課題実習Ⅰの観察からでた自身の課題と

実習校での現状を明らかにする。さらに、発展課題実習Ⅱにおいて実践したタスクを導入した授業から、生徒の様子や、思考の変容について観察・考察する。

2.2 結果

授業実践では、学習者の主体的な学びを自ら考え、思考を深めることと考え、英語学習に興味・感心をもって授業に取り組ませるため、主観的課題価値を生徒に感じさせるための手段としてタスクを用いた授業を設定した。

授業実践を経て、学習者の多くはタスクを用いた授業実践に、積極的に取り組み、グループ間での話し合いや協働学習からタスクの達成ができていた。授業の様子だけを観察すると、全ての生徒がタスク活動に関わり授業に参加しているように見えたが、一方で、タスク達成のために時間的制約、グループ内の役割認識が不足していた、あるいは、グループ内での声かけが少なかったグループでは、思うように話し合いや意見の交換ができず、英語が得意な生徒の役割負担が大きいタスク活動となった。

3. 今後の課題

本実践研究における今後の課題は、タスク達成後の学習者の動機づけがどのように変容しているかを長期的な目線でどのように観察するかということである。本実践では、50 分 1 コマの授業と 20 分程度のミニ授業から、タスクを用いた生徒の主体的な学びについて観察を行なった。主体的な学びを促す、そしてその後の変容を観察することを目指した時、2 回の授業だけでは主体的な学びを促すことができているかの判断材料として不足している。日々の授業やタスク・ベースの言語指導を取り入れた活動を継続的に比較、検討、改善を行なうことでより有効的で学習者の実生活に基づき関連したタスクの設定ができるようになる。そして、こうしたタスクの設定を行なうためには、教員として、生徒との関係性構築も重要になってくる。今回の授業実践では、授業者はタスク・ベースの指導としてタスクの達成を目的として捉えることができるが、学習者にとっては、単なるグループ活動でタスク達成に向けてという意識は薄かったように思える。タスクかどうかを認識する必要はないが、目標に向かって学習する意識がなければ、授業に参加する意義が不透明で学習者にとっては、与えられた課題をこなすだけになってしまう。そのような状況を防ぐためには、授業者と生徒間で、タスクの目的をしっかり共有することが重要である。そして、生徒の英語に対する認識や背景（英語以外に何が好きか嫌いかや得意不得意）について知ることでタスクの設定や達成後の事後指導を行うにあたり、より生徒の実態に即した授業実践の構想ができると考えた。。